

テーマ1 共同研究

小学校におけるデジタル化と学力  
～小学校教員を対象とした全国調査※に基づいて～

対象の焦点化

「1人1台・PCタブレット（端末）」が問う公立学校の履修主義のリアル（虚実と功罪）

思考の深化

「1人1台・PCタブレット（端末）」が問う  
公立学校の修得主義化した履修主義のリアル（虚実と功罪）

多用・多元化

可変化

テーマ2 ラウンドテーブル

「1人1台PCタブレット（端末）」が拓く学校教育DXの課題と可能性  
—小学校教員のデジタル化に関する全国調査※をてがかりに—

コーディネーター 西本裕輝（琉球大学） 望月重信（明治学院大学（名））  
馬居政幸（静岡大学（名）・静岡県立大学（非常勤））  
提案者 谷田川ルミ（芝浦工業大学） 西本裕輝（琉球大学）  
米津英郎（富士宮市立東小学校） 渡部和則（秋田市立八橋小学）  
討論者 藤田由美子（福岡大学） 遠藤宏美（宮崎大学）  
角替弘規（静岡県立大学）  
討論者（特別ゲスト） 唐木清志（筑波大学） 桐谷正信（埼玉大学）

テーマ1 自由研究発表

小学校におけるデジタル化と学力  
～小学校教員を対象とした全国調査※に基づいて～

西本先生による共同発表申込のための内容説明文

周知のように、現在コロナ禍により学校は大きく変化している。特に2021年4月から小中学校において一人一台タブレットが支給され、デジタル化、ギガスクール化が本格的に始動している。これにより授業のあり方も大きく変わる可能性がある。しかしその実態はまだほとんど明らかになっていない。

そこでここでは小学校教員を対象とした全国調査（公益財団法人中央教育研究所実施）に基づいて実態に迫りたい。特にタブレットの利用状況、それに対する教員の意識についてデータから明らかにする。その中で、学力上位県ほどタブレット利用について慎重である等の結果を示しながら問題提起をしていく。

西本先生の現時点での発表内容の概要は「日本子ども社会学会RT打ち合わせ資料 2022. 4. 7 「小学校におけるデジタル化と学力～小学校教員を対象とした全国調査に基づいて～」を参照ください。

# テーマ1からテーマ2への思考≡試行錯誤メモ（馬居）

対象の焦点化

「1人1台・PCタブレット（端末）」が問う公立学校の履修主義のリアル（虚実と功罪）

思考の深化

「1人1台・PCタブレット（端末）」が問う

公立学校における修得主義化した履修主義のリアル（虚実と功罪）

## ◆修得主義化した履修主義のリアル（虚実と功罪）◆

1. 虚と実：天からの声（虚）としか表現できないPCタブレットの配布（実）

1) 文科省の政策形成システム外からの要請（実）

➡文部行政（システム）の中心に位置付けることを避けてきた不作為（実）

2) 日本社会の秩序（学区、学年、検定無償）と評価配分のための国民形成（虚）

➡初等教育（知徳体共有化）と中高等教育（序列一元化）の非連続（虚実皮膜）

3) 履修主義を下位≡土台に置く修得主義の役割領域肥大化（虚実皮膜）

2. 功と罪：義務教育の入り口は履修主義➡中間混在➡出口は疑似修得主義

1) 仕切られた修得主義の制度化≡選抜システム（含む学力調査）の正当化機能を

担う履修主義（功？）➡基礎基本の境界なきラベリング（罪？）

2) 履修主義が求める共有・画一重視の初等教育➡規則≡忖度≡悪法も法（功≦罪？）

3) 修得主義化≡選別systemのsubsystemとしての中等教育の疑似履修主義（功?≧罪）

➡中学入試準備課程を組み込む大都市小学校教育の疑似修得主義化

多用・多元化

馬居の共同発表・テーマ2のラウンドテーブルに

可変性

## テーマ2 ラウンドテーブル

# 「1人1台PCタブレット（端末）が拓く 学校教育DXの課題と可能性

—小学校教員のデジタル化に関する全国調査※をてがかりに—

## ◆学校教育DX（Digital Transformation）の課題と可能性◆

1. 課題:今と未来を生きる子ども一人ひとりに応じる学びと教えのリアルな確保
  - 1) 教員に課せられる理不尽な負担の機能と有用性の診断による選別、組替、排除
  - 2) PCタブレット≠端末が生み出す思考, 志向, 指向, 試行, 施行の功罪の顕在化と操作化
2. 可能性:虚実と功罪がもたらす不公正、不合理を問い直すのがDXの初期目的
  - 1) “診断と治療”による“個別最適性”から自由な“処方箋と制度設計”の模索
  - 2) そのために必要な“知・情・意”の社会的条件(慣習、行動様式、法制度を含む仕組み≡Systemの改編・変換)を整えるのがDX(Digital Transformation)の本義  
(システム変換≡永続目的)

- i 実証データ (evidence) の構築 (タクティクス1)
- ii 学校教育のリアル (実践知) の言語・映像化 (タクティクス2)
- iii Diversity&Inclusionの視座の日常化 (ストラテジー)

“知・情・意”の社会的  
条件(慣習、行動様式、  
法制度を含む仕組み  
≡Systemの改編・変換

★～のための診断、治療、処方箋➡システム再編、再変、再構築★

# 閑話休題

(西本先生の分析結果からの思考遊戯のレベルですが・・・)

- ① ICT教育⇒PCを用いてのコミュニケーション能力の育成 (対象は全ての子ども?)
- ② GIGA school⇒児童生徒の3割を対象とする高い能力を持った“AI”開発者の育成
- ③ 学校教育DX⇒学校教育のシステム転換

現状の学力調査では把握と評価が困難な知.情.意と思考.表現.技能.機能(効能)  
→中研教員調査結果分析の視野は③にまで拡大を、と私は考えていますが・・・

## ★中研教員調査の集計結果

- ・学力調査回答率上位県 PC・タブレットの活用に消極的
- ・授業の型、教員の授業力と子ども理解の型の確定と共有化
- ・保護者の子どもの学習への関わり方の標準化

◎PC、タブレット、スマホは学習を妨げる機器、教育機器としてのみ許容  
学習指導要領、検定教科書、年齢主義、履修主義、学区固定が前提

## ★学力調査正答率下位県 PC・タブレットの活用に積極的

- ・上位県のような日本の学校教育の基盤が形成されていない?
- ・上位県とは異なる授業の型、教員の授業力と子ども理解、保護者の子どもと学習への異なるかかわり方が形成されている可能性・・・?

◎学力調査の先に待つ中学入試、高校入試、共通テスト、大学入試は修得主義?

デジタルシチズンシップの萌芽となりうる可能性は?

◎OECDの学力到達度調査 (PISA) とのズレ≡虚構の学力?

日本子ども社会学会第28回大会（2022年6月25～26日）

ラウンドテーブルのために

# 「1人1台PCタブレット（端末）が拓く 学校教育DXの課題と可能性

—小学校教員のデジタル化に関する  
全国調査※をてがかりに—

コーディネーター 西本裕輝（琉球大学） 望月重信（明治学院大学（名））  
馬居政幸（静岡大学（名）・静岡県立大学（非常勤））  
提案者 谷田川ルミ（芝浦工業大学） 西本裕輝（琉球大学）  
米津英郎（富士宮市立東小学校） 渡部和則（秋田市立八橋小学）  
討論者 藤田由美子（福岡大学） 遠藤宏美（宮崎大学）  
角替弘規（静岡県立大学）  
ゲスト討論者 唐木清志（筑波大学） 桐谷正信（埼玉大学）

※「小学校教員の教育観とこれからの小学校教育—デジタル化の流れの中で—」  
公益財団法人中央教育研究所 2022年9月発刊予定

昨年4月、全国の公立小中学校の児童生徒一人ひとりにPCタブレットが配布（貸与）された。しかも、特別な部屋ではなく日々学ぶ教室に、クラスの子どものPCタブレット全ての充電が一晩で可能な鍵のかかる保管庫とともに設置された。タブレット使用（保管庫の開閉）は担任の権限だが、操作の主導権は実質的に子どもの手にわたる。学校教育の約束ごとで教育機器（機能の限定）とされるが、機器のスペック（機能と操作性）を基準に判断すれば、保持する潜在力の顕在化を防ぐことは困難である。家庭学習（宿題や予習復習）ツール化を許容すれば、学校のルールを超える機能の発揮を競う意欲（好奇心）が生じることを避け得ず、より高度な操作を求める保護者は少なくない。それを禁止する権限は、学校と教員に与えられていない。ただし、これらはPCタブレット本来の機能に注目しての仮説である。

現状はどのように理解されているか。「学校パソコン、もう返したい、1人1台ばらまき先行、教師なお『紙と鉛筆』」（2022年2月15日日本経済新聞朝刊）との見出しによる学校と教師のサボタージュ（批判）とも“みなせる記事”の内容に、そうではないと反論する教員が多数派とは思えない。問うべきは、PCタブレットの活用頻度ではなく、「デジタル社会を生きる子どもたちに自律的なコミュニケーションや批判的な思考を教える」（上記日経記事より）ための機器と“みなされていない理由”である。

GIGAスクールやICT教育の学校での位置づけが、これまでの教室の日常で繰り返されてきた教科等の授業実践での活用方法（教育機器）のレベルに留まり（虚構）、学校教育のDXにつながる視座（実を創る志）から問われていない。この“事実”に“応える答え”を求めて、①「小学校教員の教育観とこれからの小学校教育—デジタル化の流れの中で—」（公益財団法人中央教育研究所）の調査結果、②学校管理職と教科教育研究者からの実践知、③Diversityの視座を重ねての討議を試みたい。

3月3日の第1回zoom研究会のために、共同研究とラウンドテーブルのテーマ構想過程で作成した私見（発表申込要旨の原文）です。提案と討論の参考になることを願って加筆しました。

## “1人1台 PCタブレット” は端末だろうか？

2022年2月15日日本経済新聞朝刊13面の問いに答える

昨年4月、新年度開始とともに、全国の公立小中学校に在籍する児童生徒一人ひとりにPCタブレットが配布（貸与）された。しかも、これまでと異なり、特別な部屋ではなく、子どもたちが日々学ぶ学級という名の教室（クラスルーム）に設置された。子どもの数だけあるPC・タブレット全ての充電が一晩で可能な鍵のかかる一辺ほぼ1メートル大の保管庫として。

タブレットの使用（保管庫の開閉）は担任の権限だが、取り出した後の操作の主導権は実質的に子どもの手に委ねられる。学校教育の約束ごとで教育機器（機能の限定）とされているが、配布されたPC・タブレットのスペック（機能と操作性）を基準に判断すれば、当該機器が保持する潜在力の顕在化を防ぐことは困難である。

家庭での学習（宿題や予習復習）のツールとすることを許容すれば、学校のルールを超える機能の発揮を競う意欲（好奇心）が生じることを避けえない。何よりも、より高度な操作を求める保護者は少なくない。それを禁止する権限は、学校と教員に与えられていない。



ただし、以上のことはあくまでPC・タブレット本来の機能に注目しての仮説である。現状はどのように理解されているか。

報道機関において、学校教育のデジタル化とデジタル教科書の導入を先導的に要請してきた日本経済新聞が2022年2月15日朝刊の13面全体を用いて、下記A B C 3種の見出しによる記事を掲載した。

最上段にヨコ組大見出しAによる記事と写真・図表※<sup>1</sup>を掲載し、それを受ける中段では、ヨコ組中見出しBによる記事と図表※<sup>2</sup>で結ぶ。そのあとに、Cを表題とする解説記事が加筆される。それぞれ見出しをクリックすれば、朝刊掲載時の記事のPDFが開くので一読してほしい。

[A 学校パソコン、もう返したい](#)

[B 「使わせない」がリスク増](#)

[C 日本の地方教育行政](#)

まず、大見出しAの記事では、本文とデータを分ける位置に置かれた、次のタテ長の見出しによって、見出しの主体が明かされ、その思いが具体化される。

[「1人1台ばらまき先行、教師なお『紙と鉛筆』」](#)

AとBをつなげると、教室の中のPCタブレットの現状（リアル）が映像化されよう。学校と教師のサボタージュ（批判）とも“みなせる記事”の内容に、そうではないと反論する教員が多数派とは思えない。その証左とみなしたくないが、Cでは、GIGAスクール構想に消極的な自治体首長と教育委員会の存在が紹介される。

しかし、より深刻なのは見出しBの記事である。そのキーワードは「デジタル・シチズンシップ教育」といことになるろう。

このコンセプトの意図する射程を「見出しBの記事本文」から紹介しよう。

「世界ではSNS（交流サイト）での公私の区別、フェイクニュースに振り回されないためのリテラシーといった『デジタル・シチズンシップ』の教育が盛んになっている。デジタル社会を生きる子どもたちに自律的なコミュニケーションや批判的な思考を教える。とりわけ米国はトランプ前政権下でネットを通じて陰謀論が広がり、社会の分断を招いた反省がある。」

「デジタル・シチズンシップの教材も多い。米国の非営利組織、ニュース・リテラシー・プロジェクトの「チェッコロジー」では、SNS上の個人投稿に似せた広告の存在や、報道記事と記事スタイルの広告との見分け方などを学ぶ。シンガポールの研究組織、DQインスティテュートはネットの潜在的リスクを教えるゲーム形式の「DQワールド」を手がける。」

「日本の学校教育では、スマートフォンやゲームに依存することへの注意喚起が多い。デジタル・シチズンシップを教えるよりも、学習の妨げになるネットから遠ざけたいという意図がうかがえる。」

問うべきは、PCタブレットの活用頻度ではなく、「デジタル社会を生きる子どもたちに自律的なコミュニケーションや批判的な思考を教える」ための機器と“みなされていない理由”である。

GIGAスクールのGIGAの英文は“Global and Innovation Gateway for All”  
ICTの英文は“Information and Communication Technology”

GIGAスクールとICT教育は、ここ示す英語の意味が示唆するように、いずれもPCの活用を前提に、新たな学びと教えの機会と仕組みを求める教育施策である。その意味で、DX(Digital Transformation)と連続する概念と理解する。

他方、学校に送られる公文書には「1人1台」のあとに“PCタブレット”ではなく“端末”と記される。GIGAスクールやICT教育の学校での位置づけは、教室の日常で繰り返されてきた教科等の授業実践での活用方法（教育機器）のレベルに留められる（虚構）。学校教育のDX (Digital Transformation) につながる視座（実を創る志）を友人の教員の授業で見出すことは難しい。なぜか。

先に紹介した日経新聞の記事の行間から複雑な事情が見えてくる。

「1人1台・PCタブレット」の配布については、省の外からの強固な要請に応じざるを得なかった。だが、学校現場での活用においては、PCデジタル・シチズンシップ育成に結び付けることを避けることが、文部行政の隠れた原則（虚実逆転≡無償検定教科書システム護持）・・・とみなせる・・・が・・・。

この“事実”に“応える答え”を求めて、研究仲間とともに、先に本PPTシート4で紹介した下記3種の調査、研究、実践化の論議の場の設置に挑みたい。

- i 実証データ (evidence) の構築 (タクティクス1)
- ii 学校教育のリアル (実践知) の言語・映像化 (タクティクス2)
- iii Diversity&Inclusionの視座の日常化 (ストラテジー)